

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

推薦 新進のフォルテピアノ奏者、江黒真弓のデビューCD。桐朋音大を出たのちアムステルダム音楽院でS・ホーホラントに学んだ彼女は、ここで、1800年頃に製作されたアントン・ツイラーのフォルテピアノを用いているが、その音色はモーツァルトが愛用したシュタインに近いとされる。曲目はソナタ第一番ハ長調K279、同第11番イ長調（トルコ行進曲付き）K331、同第17番ニ長調K576の3篇を主にし、それらのあいだに「オランダの歌曲（ウィレム・ヴァン・ナッサウ）」による7つの変奏曲「K25、（ロンド）イ短調K511を挿入している。すなわち、全体でモーツァルトの初期・中期・後

期の作風を一瞥するという形に、ひとまずはなっている。右記の変奏曲を選んだのは、ピアノリストのオランダ暮らしに因んでだろうか。ちなみに録音が成されたのも同国のある教会においてである。演奏ぶりは最初のうちこそ（ライヴではないにもかかわらず）やや硬い感じを与えるが、やがて本領を発揮し始め、とりわけソナタ楽章のリビート部分で随所に施される装飾は、しばしばぞんぶんに大胆なもので耳を奪う。イ長調ソナタでは、近年ハンガリーで発見された貴重な自筆譜によるヴァージョンが使われていることにも注目。江黒真弓は自ら詳細な解題も執筆しており、家としても今後期待を抱ける存在だと思わせる。たとえばイ短調（ロンド）においても、彼女は十分に音楽的な、好感度の高い演奏を披露している。

蜂尾昌男 ● Masao Mineo

【録音評】2015年、オランダでの録音。会場は教会のようであるが、過剰な響きは取り込まれておらず、この楽器にふさわしく、残響で、明瞭度は高く、かつ楽器本来の響きも上手に生かされている。音域によっては楽器の大きさに抑えられている。メカニカル・ノイズも過剰ではなくよいバランスとなっている。(92)

中でも珍しい。装飾音は存外難しい。誰でも思いつようなベタなものでは意味がないし、やり過ぎるとあざとくなる。自然な音楽の流れの中で、本物の閃きと意外性が欲しい。その点、江黒のそれはスピリットが感じられて飽きさせない。



■モーツァルト：ピアノ・ソナタ第1番／オランダの歌（ウィレム・ヴァン・ナッサウ）による7つの変奏曲／ピアノ・ソナタ第11番（トルコ行進曲付き）〔異版〕／ロンドK.511／ピアノ・ソナタ第17番

江黒真弓 (fp)
[キングインターナショナル©KKC4061]
オープン価格

那須田務 ● Tsutomu Nasuda

推薦 日本の古楽の演奏家も層が厚くなった。江黒真弓は桐朋学園大学を卒業後、アムステルダム音楽院でホーホラントにフォルテピアノを師事し、2013年からはアントワーブ音楽院でフォルテピアノを教える傍ら、ソリストとして活動しているという。これはそのモーツァルト・アルバム。1800年製アントン・ツイラーのオリジナル楽器を弾いている。もちろんウィーン式アクション。この盤の特徴は、（トルコ行進曲付き）ソナタで2年ほど前にブダペストで発見された自筆譜を参考にしてのことだろう。昨年その成果を踏まえた新版がヘンレ社から出版され、初版の再検討が可能になった。昨年暮れに

久元祐子がこのヘンレ新版と従来のペーレンライターによる新全集版を弾き比べたCDをリリースしていて、当欄でも紹介している。さて、この江黒のモーツァルト。まさにフォルテピアノによる演奏の醍醐味が詰まった秀演だ。これほど明晰なテクスチャは、モダンピアノの演奏では絶対に味わえない。その上でダイナミックかつスケールの大きな演奏を繰り広げている。注目は自由奔放に挿入された任意な装飾音で、これほどふんだんに鏝めた演奏は、あまたのフォルテピアノのディスクの